

# 『大和物語』の視点

―女からの和歌を通して

重見 未津帆

## 一、はじめに

『大和物語』に見える数多くの登場人物が、実在の誰を指すかについての研究は、これまでさまざまにすすめられてきた<sup>①</sup>。物語の中で、実名で紹介される登場人物の特定については、『後撰和歌集』など周辺の作品との関係や、当時の宮廷の様子などを知る上で、大変興味深い。しかし本論では、そのような詳しい人物考証にはこだわらず、『大和物語』に登場する女性一般とその和歌に注目し、それを通してこの物語の性格を考えていきたいと思う。

## 二、女からの和歌

『大和物語』にはたくさんの方々の歌のやり取りが見られるが、特に男性に対して女性の側から、最初に歌を詠みかけている例が目立って多い。以下は、その数と割合をあらわしたものである<sup>②</sup>。

女からの和歌の数

『伊勢物語』 一四四章段中 二十八章段（全体の約19%）

『大和物語』 一七三章段中 八十二章段（全体の約43%）

『平中物語』 三九章段中 十一章段（全体の約35%）

同じ歌物語に区分される『伊勢物語』においては、女性の歌

から始まる章段が、異本章段を含む一四四章段中、二十八章段しか見られないのに対し、『大和物語』一七三章段中には、女性同士のやりとりの歌や、女性の独詠歌も含めれば、それは八十二章段に及ぶ。『平中物語』には三十九章段中の十一章段に女性から詠じている例が見られたが、そのほとんどが男性の言動に依って詠じられたものである。「昔男」や、平貞文といった特定の男性を主人公とする『伊勢物語』や『平中物語』は、その性格上、男性が視点人物となり、女性に対して贈歌する機会が多くなることは、当然のことであろう。しかし男女さまざまな人物の話題を扱う『大和物語』においては、全体の約四割を超える章段が、女性の歌から始まっている。そしてその八十二章段中で、女性が男性にあてた恋の歌から始まる章段は、六十章段にのぼる。

まず『大和物語』の女性の歌から始まる章段中、男性にあてた恋の歌以外の例を挙げる。以後、歌を詠んでいる女性の呼び名には、二重線を付す。

『大和物語』に見える女からの和歌（恋の歌以外）

《第一段》

亭子の帝、いまはおりゐさせたまひなむとするころ、弘徽

殿の壁に、伊勢の御の書きつけける。

わかるれどあひも惜しまぬももしきを見ざらむこと  
なにか悲しき

とありければ、帝、御覧じて、そのかたはらに書きつけさせたまうける。

身ひとつにあらぬばかりをおしなべてゆきめぐりても  
などか見ざらむ

となむありける。

《第百二十六段》

筑紫にありける檜垣の御といひけるは、いとらうあり、をかしくて世を経たるものになむありける。年月かくてありわたりけるを、純友がさわぎにあひて、家も焼けほろび、物の具もみなとられはてて、いみじうなりにけり。かかりとも知らで、野大式、討手の使に下りたまひて、それが家のありしわたりをたづねて、「檜垣の御といひけむ人に、いかではむ。いづくにかすむらむ」とのたまへば、「このわたりになむすみはべりし」など、ともなる人もいひけり。「あはれ、かかるさわぎに、いかになりにけむ。たづねてしかな」とのたまひけるほどに、かしら白きおうなの、

水くめるなむ、前よりあやしきやうなる家に入りける。ある人ありて、「これなむ檜垣の御」といひけり。いみじうあはれがりたまひて、よばすれど、恥ぢて来で、かくなむいへりける。

むばたまのわが黒髪は白川のみづはくむまでなりにけるかな

とよみたりければ、あはれがりて、着たりける相ひとかさねぬぎてなむやりける。

『大和物語』第一段は、伊勢の御が弘徽殿の壁に「わかるれど」の歌を書きつけ、それを帝が御覧になつて、「身ひとつに」といふ歌を、そのかたわらに書きつけるといふものである。これはもともと返歌を期待しない、女による一種の独詠であつたとも言えようが、物語として一對の歌のやりとりとして取り上げられている。

また次に挙げた第二百二十六段では、筑紫の国に在る、「いとらうあり、をかしくて世を経たるものになむありける」檜垣の御という評判の女性を、純友の乱で都から討手の使いとして下つた野大式、すなわち小野好古がなんとか探し出すが、彼女は白髪になり、変わり果てた姿となつていたという話が描かれ

る。野大式は彼女の姿を「いみじうあはれがり」それに対して、檜垣の御が詠んだ歌が「むばたまの」の歌となる。これに対する野大式の返歌は見えないが、その歌を「あはれがりて、着たりける相ひとかさねぬぎてなむやりける」とあり、この段の話題の中心は、やはり檜垣の御という女性と、その歌であるといえるだろう。

このように、世の無常について女性が嘆き歌を詠む場面は、親しい人の死を悼み、その家族とのやりとりを描く第九段や、かつて住んだ場所の、変わり果てた姿を見た女性の独詠を描く第十段など、この他にも数例見える。しかしそれ以上に『大和物語』には、先述の通り、女性から男性にあてた恋の歌が六十例と目立って多い。次にその中から、女性が歌を詠む理由、その事情が述べられている例を挙げる。

女の恋の歌―女が歌を詠むに至る事情が述べられている例

#### 《第十四段》

本院の北の方のみおとうとの、童名をおほつぶねといふ、いますかりけり。陽成院の帝に奉りたりけるを、おはしまさざりければ、よみて奉りける。

あらたまの年は経ねども猿沢の池の玉藻はみつべかり

けり

《第十五段》

また、釣殿の宮に若狭の御といひける人を召したりけるが、  
またも召しなかりければ、よみて奉りける。

「かずならぬ身におく夜の白玉は光見えさすものにぞあ  
りける

とよみて奉りたりければ、見たまひて、「あなおもしろの  
玉の歌よみや」となむのたまひける。

第十四段、第十五段はともに、女性側から先に歌を詠み、帝  
に献上したという例である。第十四段は「おほつぶね」とい  
う女性が帝にお仕えすることになるがお召しがなく、奈良の帝に  
召されながら、寵愛を受けられなくなって猿沢の池に投身した、  
采女の伝承を踏まえた「あらたまの」という歌を贈っている。  
この猿沢の池の采女の話は『大和物語』の後半部、第五百十段  
にも見える話であるが、「私をほうっておくと、あの采女のよ  
うに、そのうちに身を投げてしまいますよ」という、いささか  
脅迫的な内容であると言えよう。

続く第十五段では若狭の御という女性が、やはり帝からのお

召しがなくなり、「かずならぬ」の歌を贈り、そのことによつ  
て帝から「あなおもしろの玉の歌よみや」と評価されている。

連続するこの二段は「帝のお召しがない」ということに対し  
て、訪れを求め、帝に積極的に和歌を贈る内容になっている。「男  
性の訪れがない、もしくは遠のいた」といった不安な出来事に  
対して、女性の側から歌を贈り、訪れを願うといった例は、後  
で紹介する鈴木一雄氏の御論にもあるように、この物語以外で  
もよく見られるケースである。しかし『大和物語』にはこれと  
は異なり、女性が不安に思う事情が明らかになっていないにも  
関わらず、女性の側からまず歌を詠むという例も見える。その  
中で男性からの返歌があるものを以下に挙げる。

女の恋の歌―女が不安に思う事情が述べられておらず、男の返  
歌がある例

《第二十一段》

良少将、兵衛の佐なりけるころ、監の命婦になむすみける。

女のもとより、

柏木のもりの下草老いぬとも身をいたづらになさずも  
あらなむ

返し、

柏木のもりの下草老いよにかかる思ひはあらじとぞ  
思ふ

となむいひける。

《第百四段》

滋幹の少将に、女、

恋しさに死ぬる命を思ひいでて問ふ人あらばなしとこ

たへよ

少将、返し、

からにだにわれ来たりてへ露の身の消えばともにと契  
りおきてき

《第六十二段》

のうさんの君といひける人、淨藏とはいとになう思ひかは  
す仲なりけり。かぎりなく契りて、思ふことをもいひかは  
しけり。のうさんの君、

思ふてふ心はことにありけるをむかしの人になにをい

ひけむ

といひおこせたりければ、淨藏大徳の返し、

ゆくすゑの宿世を知らぬ心には君にかぎりの身とぞい

ひける

第二十一段では、監の命婦という女性から、「柏木の」という、  
年をとつて老いた身になつても見捨てないでほしいという歌が  
贈られているが、先に挙げた例とは異なり、男性にこの歌を詠  
みかけるきっかけになつた、訪れがないなどの、女性が不安に  
思う原因が物語の中に紹介されていない。

また第百四段にしても、滋幹の少将と女のこれまでの関係は  
特に語られず、ただ女性からの恋の歌「恋しさに」の歌があ  
り、それに対する男性の返歌といったやりとりのみが描かれて  
いる。

さらに第六十二段では、女の不安な心というよりもむしろ、  
「いとなう思ひかはす仲」で、「かぎりなく契りて、思ふこと  
をもいいかは」す、相愛の二人のやりとりとなつてゐる。この  
場合も、「のうさんの君」、すなわち女性から男性に「思ふてふ」  
という歌を贈つてゐる。

さらに『大和物語』には、男性の返歌が見られず、ただ女性  
から男性にあてた歌のみが紹介されている段も見える。

女の恋の歌―女が不安に思う事柄が述べられておらず、男の返

歌がない例

《第二十六段》

桂のみこ、いとみそかに、あふまじき人にあひたまひたりけり。男のもとによみておこせたまへりける。

それをだに思ふこととてわが宿を見きとないひそ人の聞かくに  
となむありける。

《第六十段》

五条の御といふ人ありけり。男のもとに、わがかたを絵にかきて、女の燃えたるかたをかきて、煙をいとおほくくゆらせて、かくなむ書きたりける。

君を思ひなままし身をやく時は煙おほかるものにぞありける

《第百十二段》

おなじ女（前段に登場する、大膳の大夫きんひらの三女）、のちに兵衛の尉もろただにあひて、よみておこせたりける。風吹き、雨降りける日のことになむ。

こち風は今日ひぐらしに吹くめれど雨もよにはたよに

もあらしな

とよみけり。

《第百十四段》

桂のみこ、七夕のころ、しのびて人にあひたまへりけり。さて、やりたまへりける。

袖をしもかさざりしかど七夕のあかぬわかれにひちにけるかな

とありけり。

第二十六段では、桂のみこという女性が「いとみそかに、あふまじき人にあひ」なさって、その後、男性に「それをだに」という歌を贈るというもの、第六十段では五条の御という女性が、自分の燃えた姿を描いて、その絵に「あなたを思い、恋の炎で身を焼く時は、こんなに煙がでるのです」といった、大変情熱的な歌を、書きつけて贈るという話が語られる。

さらに第百十二段でも、女性から男性に、「今夜も会いたい」と、「こち風は」という男を待つ気持ちを詠んだ歌を贈っている。そして第百十四段では、また桂のみこが「あなたとの逢瀬の別れがつかなくて、袖が濡れてしまった」という歌を、人目をしの

んで逢った男に贈っている。

これらの段はいずれも、その歌を詠むに至る、やむにやまれぬような深い事情や、契機となった男性の言動には触れていない。また歌に対する男性の反応も記さないままである。物語はただ女性の、男性を思う気持ちを詠んだ歌のみ、紹介している。

またこの女性からの和歌をもつ段の中には、女性から男性に思いを打ち明けるという例も見える。

女の恋の歌―女から思いを打ち明ける例

《第四十段》

桂のみにこに、式部卿の宮すみたまひける時、その宮にさぶらひけるうなるなむ、この男宮をいとめでたしと思ひかけたてまつりけるをも、え知りたまはざりけり。蛍のとびありきけるを、「かれとらへて」と、この童にのたまはせければ、汗衫の袖に蛍をとらへて、つつみて御覽せさすとて聞こえさせける。

つつめどもかくれぬものは夏虫の身よりあまれる思ひなりけり

《第八十五段》

おなじ右近、「桃園の宰相の君なむすみたまふ」などいひののしりけれども、虚言なりければ、かの君によりて奉りけり。

よし思へ海人のひろはぬうつせ貝むなしき名をは立つべしや君となむありける。

第四十段では、式部卿の宮のことを「いとめでたしと思ひかけたてまつりける」女童が登場する。しかし宮はその女童の気持ちを知りえずにいた。ある時、蛍をとらえるという宮の仰せで、女童は汗衫の袖に蛍を捕らえ、「つつめども」と、その漏れる光を、宮に対する自らの隠せない思いにたとえる歌を詠みかける。

また第八十五段では、右近という女性が、自分と根も葉もない噂がたっている桃園の宰相に対して、「いつそのことうわさ通り私を愛して下さい」という歌を贈っている。これはいずれもなんらかのきっかけがあるとは言え、女性の方から歌を贈り、男性に対し積極的に慕う気持ちを打ち明けている例と言えよう。

このように、さまざまな立場・状況に置かれた女性からの歌の例が多く見える『大和物語』であるが、女性の側から男性に対して歌を詠むということは、そもそもどのような行為なのであろうか。

鈴木日出男氏は、その御論<sup>(3)</sup>の中で、「女歌」について次のように整理される。

男が相手の女に恋慕しかけるのに対して、それを受ける女が何らかの形で切り返して応ずるといふのは、男女の贈答歌本来の作法であった。おそらく、贈答歌の最も原初的な形であったらしい歌垣の歌以来の伝統であろう。(中略) 女歌とは、恋や恋の情調を詠もうとする、その発想の根源に否定的な契機がはさまれている歌ということになる。それが、対人性に執る場合に、相手を言い負かそうとする切り返しのひびきが強まり、逆に自己に執る場合には、孤独な内容や悲哀の心象風景の色彩が強められるのである。そこに女歌の本性があるように思われる。たとい男であつても、そのような発想に立って詠めば、それも女歌のうちの一つである。(中略) 反発、切り返しの発想は、贈答歌における返歌の常套としての、女歌に特有のものである。

ないかと思われる。

つまり「女歌」とは、はじめに男が懸想の内容で詠みかけたその歌に対して、女性が反発、切り返しの発想で詠み返すもので、その発想の根源には否定的な契機がはさまれ、そこには相手を言い負かそうとする反発、切り返しの発想があるのだという。そしてその発想は、女歌に特有のものであるというのである。

もちろん、この鈴木氏のご指摘が「女歌」というものの原理的な把握であることには注意しなければならない。しかしやはり『大和物語』の「女性からの歌」は、少なくともこの平安時代の恋の贈答歌に多くみられる「女歌」の例には当てはまらないといえるのではないだろうか。

さらに『源氏物語』や『和泉式部日記』の女性からの和歌について、鈴木一雄<sup>(4)</sup>氏は、和歌は通常男から女へと贈るもので、「女からの贈答の場合は女の特別な感情、意志、要求が働き、女の心の不安と緊張、女の二人の関係への危機感が暗示される」と言い、女性が自分から男性に歌を贈る場合は、「そこになんらかの不安材料となる事柄があると、指摘されている。

たしかに先に挙げた、第十四段、第十五段のように、男性の



訪れがない、不安な女性の気持ちを詠む歌は『大和物語』にも見える。そこには鈴木日出男氏の言われる「否定的な契機」を見ることができよう。しかしその他に挙げた例をはじめ、この従来の女歌に当たらない、女性からの歌が『大和物語』には散見されるのである。

高木和子氏は『和泉式部日記』についての御論<sup>5</sup>の中で、「女からの贈歌による贈答は、確かに数量からすれば少数ではあるが、それが必ずしもこの二人の関係の危機や女の不安感の表れだとは言い難い。むしろ贈答のかけあいの様々なバリエーションを披露するために、物語的場面設定として、より新鮮な形を模索し続けた結果ではなからうか」と指摘される。高木氏がおっしゃるように、特定の男女が織りなす『和泉式部日記』の中では、女性からの贈歌は、「戦略的な虚構の方法」として考えることができるだろう。しかし、さまざまな男女が登場する『大和物語』においては、女性からの歌を、贈答歌のバリエーションといった、表現上の工夫としてのみ解釈することは適切ではないのではないだろうか。それでは『大和物語』に見える多くの女性からの歌を、どう見るべきであろうか。

### 三、「大和物語」の視点

『大和物語』の中には、和歌の前にその歌を詠んだ人物を紹介する短い言葉だけがついて、女性が男性に恋の歌を詠みかけるといふ章段が、次のように見える。

人物のみを紹介している章段

#### 《第百七段》

おなじ宮（前段に登場する故兵部卿の宮）に、こと女、あふことの願ふばかりになりぬればただにかへしし時ぞ恋しき

#### 《第百十段》

おなじ女（前々段に登場した南院のいま君）、人に、大空はくもらずながら神無月年のふるにもそではぬれけり

#### 《第百十七段》

桂のみこ、嘉種に、露しげみ草のたもとを枕にて君まつむしの音をのみぞ

なく

《第百十八段》

閑院のおほいきみ、

むかしより思ふ心はありそ海の浜のまさごはかずも知  
られず

第百七段は前段の内容を受けて「おなじ宮」と言うが、これは故兵部卿の宮を指し、「こと女」が宮に会いたいと願う気持ちを「あふことの」と詠む。また第百十段「おなじ女」すなわち南院のいま君も、第百十七段の桂のみこも、同じように慕う男性に会いたいという気持ちを詠みかける。第百十八段では閑院のおほいきみが、「昔からあなたを思う心は、浪の荒い磯辺の砂のように、はかりしれないほどのものだ」と、男を思う気持ちが強いということを詠んでいる。

このように和歌の前にただ詠者と、その歌の受け取り手となる人物のみ紹介する章段は『大和物語』中に八章段見えるが、そのうち男性の歌から始まるものは、次に挙げる二章段のみで、他は全て女性の紹介とその歌で構成されている。

人物のみを紹介する章段のうち、男の歌から始まるもの

《第三十二段》

躬恒が院よみて奉りける。

立ち寄らむ木のもともなきつたの身はときはながらに  
秋ぞかなしき

《第五十段》

かいせん、山にのぼりて、

雲ならで木高き峰にゐるものは憂き世をそむくわが身  
なりけり

これら人物を短く紹介し、その和歌のみ載せる章段の内容は、男性の場合は恋の歌ではなく、昇進できないことや、世のあわれについての嘆きを詠むものである。対して、女性の歌の場合は、先に挙げた第百七段や第百十八段のように、恋についての嘆きをいうものとなる。詠作事情も定かではないこれらの章段は短く、そこに紹介する恋の和歌だけで成り立っていることから、逆にはっきりと全てが女性の気持ちに即して、女性の立場から語られている章段であるといえるだろう。このことはここまで見てきた女性からのさまざまな和歌を含む章段でも、

やはり共通して言えることだと思ふ。

一方、これと同じような短い章段は『伊勢物語』にも見えるが、その場合は歌の詠み手、視点人物は、他の多くの章段と同じく「昔男」、すなわち男性となっている。

### 《第二十八段》

むかし、色好みなりける女、いでていにければ、

などでかくあふごかたみなりにけむ水もらさじと結

びしものを

### 《第三十段》

むかし、男、はつかなりける女のもとに、

あふことは玉の緒ばかりおもほえてつらき心の長く見

ゆらむ

『伊勢物語』第三十段では、男性が「あふことは」という恋の嘆きの歌を、女にあてて贈っている。また第二十八段のように、出奔するという事件を起こしたのが「色好みなりける女」であつても、物語は男性の立場で、男性に「などでかく」という歌を詠ませている。このように『伊勢物語』には、女性の行

動を先に描きながら、それを受けて男性が歌を詠むという例が、長い本文を持つ章段の中にも多く見られる。しかし『大和物語』の場合は、男性の言動を契機に詠まれた、女性の歌だけを紹介するという例が見える。

男性の言動によって詠まれた女の歌

### 《第七十八段》

監の命婦、朝拝の威儀の命婦にていでたりけるを、彈正の

親王見たまひて、にはかにまどひ懸想したまひけり。御文

ありける御返りごとに、

うちつけにまどふ心と聞くからになぐさめやすくおも

ほゆるかな

親王の御歌はいかがありけむ、忘れにけり。

### 《第九十段》

おなじ女（前段に登場した修理の君）に、故兵部卿の宮、

御消息などしたまひけり。「おはしまさむ」とのたまひけ

れば、聞こえける。

たかくともなにかはせむ呉竹のひと夜ふた夜のあだ

のふしをば

第七十八段のこの歌は、いわゆる反発の女歌である。監の命婦に懸想をした彈正の親王の歌への返歌という形で語られている。しかし物語はこの親王の歌を一つも紹介せず、むしろ、「親王の御歌はいかがありけむ、忘れにけり」とし、その時の命婦の歌「うちつけに」についてだけ紹介している。

また第九十段では、故兵部卿の宮がおなじ女、すなわち前段に登場した修理の君に対して、文などを贈り、会おうとした時に女が詠んだ「たかくとも」という歌だけを取り上げている。これはもちろん、女性からのこの歌が、特に評判になったからだということもあるのだろうが、やはり女性が話題の中心になっている例といえるのではないだろうか。

先に見たように、『伊勢物語』は、主人公である男性の立場で描かれる章段が多く、女性からの和歌はほとんど見えない。それに対し、『大和物語』には従来の女歌とは異なる、女性からの積極的な和歌や、女性主体の章段が数多く見える。これは『大和物語』後半部の説話的章段でも共通して言えることである。

ここまで何度か比較対象に挙げた『伊勢物語』であるが、『大和物語』には『伊勢物語』と同じ、もしくは似た話がいくつか

収録されている。例えば『伊勢物語』第三段と『大和物語』第六十一段はその一例である。

『伊勢物語』 三段

むかし、男ありけり。懸想じける女のもとに、ひじき藻といふものをやるとて、

思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも

二条の後の、まだ帝にも仕うまつりたまはで、ただ人にておはしましける時のことなり。

『大和物語』 百六十一段

在中将、二条の後の宮、まだ帝にも仕うまつりたまはで、ただ人におはしましける世に、よばひたてまつりける時、ひじきといふ物をおこせて、かくなむ、

思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむひじきものには袖をしつつも

となむのたまへりける。返しを人なむ忘れにける。(後略)

『伊勢物語』第三段では「思ひあらば」の歌を詠んでいるの

は「懸想しける女のもとに、ひじき藻といふものをやる」人、すなわち男性であるとはつきりわかる。しかし、『大和物語』第百六十一段では、歌のあとに「となむのたまへりける」とあり、この敬語表現から、「思ひあらば」という歌は二条の后からのもの、つまり女性からのものではないかとも考えられる。

この部分の解釈については諸説あり、たとえば日本古典文学大系『大和物語』<sup>6</sup>は、特に理由は述べずに、この歌は「在中将」すなわち男性の歌と注している。また本稿が底本とした新編日本古典文学全集『大和物語』では、詠み手が誰かということについては特に触れていない。

たしかに懸想した男性が、相手の女性にもものを贈るといふことはよく見られることであるが、先に述べた「のたまひける」という敬語の使われ方から、片桐洋一氏<sup>7</sup>はその解説の中で、『大和物語』第百六十一段の歌は、女性からの歌であると述べておられる。

『伊勢物語』は男と女の話としてまず構成し、末尾に注のような形で二条の後のこととしているのを、『大和物語』でははつきりと在中将と二条の後の話にしてしまっている。また「思ひあらば」の歌が『大和物語』では二条の后

の歌になっている。(中略)そして「思ひあらばむぐらの宿に寝もしなむ」と、むしろ二条の後のほうが積極的であったという書き方になっている。

このように片桐氏は、この「思ひあらば」という歌が、二条の後の積極性を示す歌であるということも指摘される。さらにこの段については、妹尾好信氏<sup>8</sup>も「これは女の方から駆け落ちも辞さないという覚悟のほどを表明してきたとしているわけで、歌語りとしてより興味深い形を追求した『大和物語』独自の伝えと見られる」と、片桐氏と同じ見解を述べておられる。先述したように、この部分の解釈は諸説あるが、これまで見てきたとおり、『大和物語』が女性からの積極的な気持ちを告げる歌を多く描いていることを考えれば、この第百六十一段の歌もまた、その一例であると考え、解釈できるのではないだろうか。

また『大和物語』と同じころ成立したとされる『後撰和歌集』恋の部にも、これまで見た『大和物語』の例のように、「男のもとにつかはしける」といった詞書を持った女性から男性に贈る歌が数多く見える。<sup>9</sup>

巻九 恋一 五六九

つらかりける男に

よみ人しらず

絶え果つる物とは見つつささがにの糸をたのめる心細さよ

巻九 恋一 五九四

男のもとにつかはしける

中務

はかなくて同じ心になりにしを思ふがごとは思ふらんやぞ

この『後撰和歌集』について片桐洋一氏は、『後撰集』には有名無名問わず、女性の詠が大変多く、このことは『後撰集』の大きな特徴である」と指摘されている。片桐氏はそれらについて「男性の歌に付随してのみ伝えられたようなものでは決してなく、その多くは女性の立場から女性中心に構成されている」と述べられるが、この特徴は、『大和物語』においても言えるのではないかと思う。

さらに『大和物語』の類話は『伊勢物語』以外の作品にも、さまざまに見えるが、例えば先に挙げた第一段の類話が、『大鏡』に次のようにある。<sup>11)</sup>

「(前略) 伊勢の君の、弘徽殿の壁に書きつけたうべりし歌

こそは、そのかみに、あはれなることと人申ししか。

別るれどあひも思はぬももしきを見ざらむことやなにかかなしき

法皇の御返し、

身ひとつのあらぬばかりをおしなべてゆきかへりても

などか見ざらむ」

と言へば、かたはらなる人、

「法皇の書かせたまへりけるを延喜の、後に御覧じつけて、

かたはらに書きつけさせたまへるともうけたまはるは、い

づれかまことならむ」

『大和物語』では「別るれど」は「伊勢の御」の詠、「身ひとつに」は「帝」すなわち宇多天皇の詠とするのに対して、『大鏡』は「法皇の書かせたまへりけるを延喜の、後に御覧じつけて、かたはらに書きつけさせたまへるともうけたまはるは、いづれかまことならむ」と、異なった伝えを補足する。さらに『古今和歌六帖』でも、『大鏡』と同じく、「別るれど」の詠者を「ていしのみか」としている。

また先述した『大和物語』第四十段の類話が、『後撰和歌集』に次のように見える。

桂のみこの「ほたるをとらへて」と言ひ侍りければ、  
 わらはのかざみの袖につつみて、 よみ人しらず  
 つつめども隠れぬ物は夏虫の身よりあまれる思ひなりけり

『後撰和歌集』は女性である「桂のみこ」にあてて、「わらはは」が歌を詠んだとする。しかしそもそも「かざみ」は童女が柏の上に着るものであることから、この部分の解釈も諸説ある。例えば片桐洋一氏は、「桂の皇女の許に来た（よみ人知らずのある男性が、女の童のかざみを借りてそれに包んで」と解すべきであろう」と注しておられるが、ともかく『後撰和歌集』においては歌を詠んだのは男性であるとして見ることができさるだろう。しかし一方、『大和物語』では、「桂のみこ」のもとに通う「式部卿の宮」にひそかに思いを寄せた「うなる」が登場し、男性である「式部卿の宮」にあてて、「つつめども」の歌を詠んだとしている。

これら類話の例は、どちらが事実であったかということとはひとまずおくとして、歌をとりまく伝えが複数あったということを残している。そしてその中で、『大和物語』は「伊勢の御」や「う

なる」という、「女性が詠じた歌に対して、男性が応えた」という伝えを採用している。これらのことは、『大和物語』が持つ女性の歌、特に積極的に自ら詠じる女性の詠に注目する姿勢を表すものと考えられないだろうか。

#### 四、まとめ

『大和物語』には、不安や危機感、否定的な契機が語られない場合にも、女性の側から歌を詠むという章段が多く見られた。また出来事の発端が男性の言動にある場合にも、女性とその歌に関心を寄せ、女性を物語の中心とする例も見られた。さらに詠作事情を述べず、人物のみ紹介する例においても、物語には女性の歌に注目する姿勢がうかがえる。

今井源衛氏は、『大和物語』について、「終始ゴシップに密着した」、「文芸への昇華過程を経ていない」、「伊勢物語の後で生まれながら、それよりもかえって幼い精神の段階」に位置している物語だと解説されている。たしかに、『伊勢物語』のように、「昔男」という「抽象化された普遍的人物の一代記」といった統一はなされておらず、雑多な登場人物は、一見まったく整理されていないもののようにも見える。しかし、これまで確認

してきたように、『大和物語』には、女性とその歌に注目するという特徴が見られる。宮中の噂話や、世俗的・ゴシップ的な話だけではなく、自らの思いを歌に託して男性へ贈り、女性側から恋い慕う気持ちを打ち明けるといった、積極的な女性の姿にこそ、この物語の作り手の視線・興味が向けられているのではないかと考える。

『伊勢物語』が男性の言動、そして歌を描くことと同じように、『大和物語』は女性の立場から、女性とその歌を描こうとしているのではないか。これに留意して読みなおすと、『伊勢物語』とも『平中物語』とも違う、『大和物語』という作品の個性がうかがえる。女性に焦点を当てるといふ個性は、同じ頃成立した『後撰和歌集』にも見られる傾向である。『源氏物語』前夜であるこの時代の、新しい捉え方・位置づけが求められるのではないだろうか。

〔注〕

- (1) 森本茂氏『大和物語の考証的研究』（和泉書院・一九九〇年）や今井源衛氏『大和物語評釈』（笠間書院・一九九九年）などに、詳しく考察されている。

- (2) 本稿では『新編日本古典文学全集12 竹取物語・伊勢物

語・大和物語・平中物語』（小学館・一九九四年）の校訂本文を底本に用いた。ただし引用する際に、私に表記を改めた箇所がある。また『伊勢物語』のいわゆる異本章段については、底本に従い考察の対象とした。

- (3) 鈴木日出男氏『古代和歌史論』（東京大学出版会一九九〇年）

- (4) 鈴木一雄氏『王朝女流日記論考』（至文堂 一九九三年）

- (5) 高木和子氏『女から詠む歌―源氏物語の贈答歌』（青簡舎 二〇〇八年）

- (6) 『日本古典文学大系9 竹取物語・伊勢物語・大和物語』（岩波書店 一九五七年）『大和物語』は阿部俊子氏・今井源衛氏校注。

- (7) 片桐洋一氏編『鑑賞日本古典文学5 伊勢物語／大和物語』（角川書店 一九七五年）

- (8) 妹尾好信氏『講座平安文学論究』第14輯『伊勢物語』の形成過程と段末注記』（風間書房 一九九九年）

- (9) 『後撰和歌集』引用については、片桐洋一氏校注『新日本古典文学大系6 後撰和歌集』（岩波書店・一九九〇年）を用いた。

- (10) 片桐洋一氏『古今和歌集以後』「後撰集の表現」（笠間



書院 一九六四年)

(11) 『大鏡』引用については、『新編日本古典文学全集34 大鏡』(小学館・一九九六年)を用いた。

(12) 注9 『新日本古典文学大系6 後撰和歌集』(岩波書店・一九九〇年) 脚注。

(13) 注6 『日本古典文学大系9 竹取物語・伊勢物語・大和物語』(岩波書店 一九五七年) 『大和物語』解説。

\*本稿は、平成二十三年度中古文学会秋季大会での口頭発表をもとにしてまとめたものである。口頭発表時にご教授を賜った方々に厚く御礼申し上げます。

(しげみ みづほ／清風南海中学校高等学校非常勤講師)